

「移民・難民問題」について少し冷静に考える

新年早々大変有意義な対談を読むことができた。是非一読されることをお勧めしたい。

---

SNS で「敵」の悪口を書き連ね、仲間内だけで褒め合っているだけでは無意味 「本当に社会を変える」のに必要な戦いとは何か？ 倉本圭造×橋本直子対談

私自身は、この対談にたどり着くまでに、以下1～3のようなことを考えていたのだが、それを「補強」するだけでなく「不十分な点にしっかり目を開かせてくれる」素晴らしい対談内容だった。

### 1. 東アジアの人間は皆同じに見える？

フィンランドのミス・コンテストで選ばれたサラ・ザフチエが、SNSに「つり目」を想起させるポーズの写真を投稿したことが問題になった。（人さし指でまぶたを上に引っ張る「つり目ポーズ」は、東アジアの人々の容姿を嘲笑する場合に使われるため。）

一時期、日本国内でも「韓国人は皆同じ顔に見える」といった記述やコメントがネット上に多く見られたが、「アジア系の人々を下に見る意識を持った欧米人」には、「日本人・韓国人・中国人」などまとめて同じように見えるのかもしれない。「皆同じ顔に見える」といった発言や感覚の中には、おそらく差別意識がある。

[ちなみに、『はみだしの人類学 ともに生きる方法』の著者である松村圭一郎は、その講演の中で「欧米に旅行している最中、自分に向かって『チャイニーズ？』と声をかけられた時、『そう見えるだろうな』という感想ではなく『俺は違う！』と強く言いたい気持ちになるのはなぜか」、という問いかけをしていた。]

### 2. 「モスクの建設計画に反対」、といった投稿について

関連して、「ムスリムと共生は不可能」、「テロ拠点になる」、「イスラームの文化が受け入れられないから困るというのなら、最初から日本に来るな」等々

上記最後のコメントについて一言。日本国内にはおそらくモスクの（少なくとも）数十倍はキリスト教があるだろう。明治以降は、日本国内で合法的に布教活動が行われている。さらに言うと全国各地にキリスト教系の幼稚園は無数にあり、一部キリスト教の教義を入れた教育（例：「主である神に感謝して○○をいただきましょう」といった）が行われている。（単にムスリムの礼拝場所確保を目的とする）モスク建設に反対する人たちは、キリスト教会を問題視していないようだ。宗教でいえば「イスラーム」や「ムスリム」に対する偏見がありはしないか。

また、「テロ拠点になる」というコメントに対しては、「アルカイダの拠点のあったアフガニスタン」で現地と人々とともに「命の水路の建設に取り組んだ中村哲の追悼動画」の視聴をすすめたい（9分あたりから28分あたりまで）。

#### 中村哲医師追悼の会——中村先生と共に歩む—

動画再生中、厳格なムスリムである現地人の表情や「お腹いっぱいになれば誰も戦争になんか行きません」という言葉に注目したい。

また、冒頭のリンクで紹介した橋本の発言：「2022年3月から日本政府は、ウクライナ避難民に対してほぼ無条件でビザを瞬く間に発給し、日本史上類を見ない寛大な受け入れ方を官民一体となってやった。一方で、その半年くらい前にアフガニスタンから、日本の大使館や JICA、NGO などで長年働いた非日本人の現地職員が『外国勢力で働いた裏切り者』としてタリバンに迫害されるから日本に退避したいと言ってきた時に、大多数の元現地職員に対して日本政府は査証発給を拒否した」という事実に対してどのように考えるのだろうか。ウクライナ避難民との落差を問題にしないとすれば、そこに差別意識はないだろうか。

### 3. 埼玉県川口市の「クルド人問題」について

これについては日本人初の国連難民高等弁務官として活躍した緒方貞子の取り組みを紹介したい。従来の「国家主体の軍事力による安全保障」ではなく、紛争や貧困など、あらゆる脅威から人々の安全や尊厳を守る「**人間の安全保障**」という理念を掲げ、世界に訴え、それまで支援の対象となっていましたなかったクルド人も難民として支援する道を開いた。

[https://note.com/tbsnews\\_sunday/n/ne3564b4e5085](https://note.com/tbsnews_sunday/n/ne3564b4e5085)

また、冒頭に紹介した「橋本・倉本対談」の全体が、この問題を考えるための示唆に富んでいる。「相手側（外国人の増加に不安を感じそれを強く批判する人たち）がそれを主張する事情を迎えに行って、相手の懸念点を解決する」という発想は極めて貴重なものとして学ぶことができた。改めて、是非一読されることをお勧めしたい。